



口腔機能発達不全症・口腔機能低下症の診療を実施している医院の事例を紹介します

乳幼児・学齢期には適切な獲得、高齢期には維持・向上のため口腔機能に対する生涯を通じた歯科医療による介入が必要です

## ▶ 検査結果による根拠に基づく診療へ 口腔内の健康を「トータルケア」するために

### 検査の重要性について

当院では、患者さんの状態を正確に把握し、最適な治療を提供するため、**初診時から各種検査を実施**しています。検査結果に基づいて治療計画を立案し、必要な処置を行うことで、科学的根拠に基づいた診療を実現しています。

### 検査を行うメリット

**客観的な評価が可能**：検査を行い、数値で管理することで、患者さんの健康状態を客観的に確認できます。

**治療効果の検証**：実施した処置の効果を数値で評価できるため、治療の質を高めることができます。

具体例として補綴治療によって器質的な回復が得られた場合、「食べる」機能が改善し、食事バランスや体組成の改善が期待されます。こうした変化も、検査を行うことで客観的に評価することが可能です。

### 当院が導入している

### 検査

- P検査
- 唾液検査
- レントゲン
- 口腔機能検査
- 身長
- 体組成分析
- 血液検査
- 血圧検査



待合室の一角に体組成計や血圧検査を実施するスペースを設置



なみき通り歯科  
矯正歯科

院長 安藤 壮吾 先生  
(愛知県名古屋市)

当院は、う蝕や歯周病の治療にとどまらず、嚙む・飲み込む・話すといった口腔機能まで含めて総合的に診る歯科医院です。各種検査に基づいてお口の状態を可視化し、予防・治療・機能回復を一体として考える診療を行っています。口腔機能低下症の診断を通して、食べる力と全身の健康を支えることを目指しています。



### 治療計画における検査の役割

検査は、治療方針を決定するうえで重要な指標となります。数値に基づいた診断は、患者さんにとっても納得感が高く、説明責任を果たすうえでも不可欠です。

### まとめ

検査は、患者さんの健康を守るための第一歩であり、質の高い歯科医療を提供するための基盤です。ぜひ、検査の重要性をご理解いただき、積極的な実施をご検討ください。

### 症例

患者 50代 男性

主訴：入れ歯を作ってほしい  
既往歴：舌がん



**Point!** 初診と咬合再構成後に検査を実施している。咬合再構成にもかかわらず回復しない場合は、改善していない機能の訓練を重点的に実施。

**初回検査**：口腔機能検査を実施し、

5項目に該当したため、口腔機能低下症と診断。義歯を新製した。

**1年2か月後**：義歯新製による咬合再構成後の再評価を実施。4項目該当しており、口腔機能低下症と診断。舌口唇運動機能は回復してきたが、舌圧が回復していないため、ペコぱんだを用いた舌抵抗訓練を指導した。

**2年5か月後**：再評価を実施。該当項目が2項目となり、口腔機能低下症から回復が確認された。ペコぱんだを用いた舌抵抗訓練により、舌圧も回復したため、引き続き定期診断にて使用方法の指導を行った。1年後に再評価を実施予定。

	初回	1年2か月後	2年5か月後
口腔衛生状態不良[TICI(%)]	61.6	100	61.6
口腔乾燥[口腔粘膜湿度]	28	28	27.5
咬合力低下[残存歯数(本)、 ※口腔機能モニター(N)]	7	6	99*
舌口唇運動機能低下 (回/秒)	/pa/ 5.4	6.8	7.0
	/ta/ 5.4	6.6	7.0
	/ka/ 5.0	6.2	6.4
低舌圧(kPa)	21	22.3	32.6
咀嚼機能低下 [グルコセンサー(mg/dL)]	62	97	104
嚥下機能低下[EAT-10(点)]	0	0	0

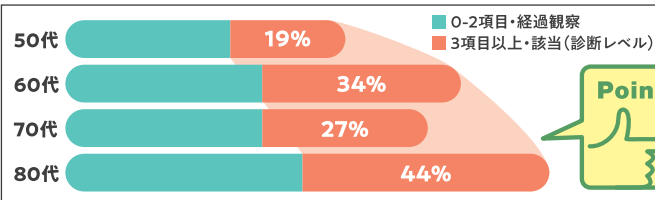


図 口腔機能低下症有病率(当院受診50歳以上初診患者124名)

**Point!** 年代とともに増加。50代でも19%の方が口腔機能低下症に該当している点に注目。



管理栄養士による食事指導の様子



当院では、口腔機能低下症の検査を50歳以上のすべての方に行っています。50代はまだ若いと思われがちですが、実際には3項目以上該当する方や深刻な状態の方もいます。だからこそ、50代から取り組むことに大きな意味があります。若いうちに気づき、早期に介入するために、まずは検査を行い、数値で管理することで患者さんの口腔機能を守っていきましょう。

(歯科衛生士 水谷 恵さん)

※2026年6月現在の情報です。

